

病院 Web サイトでの積極的な情報発信は職員の意識を変える

市立島田市民病院 事務部¹⁾
医療情報部²⁾
島田市病院事業管理者³⁾

友野 克利¹⁾ 大畑 和弘¹⁾
落合 昭之¹⁾ 中野 恵之¹⁾
太田 政志²⁾ 杉村 聡²⁾
櫻井 秀輝²⁾ 森下 宗自²⁾
服部 隆一³⁾

本稿の要旨は、2011(平成23)年7月15日、第61回日本病院学会で発表した。

はじめに

インターネットの普及に伴い、ほとんどの病院が Web サイトを開設している。病院 Web サイト情報

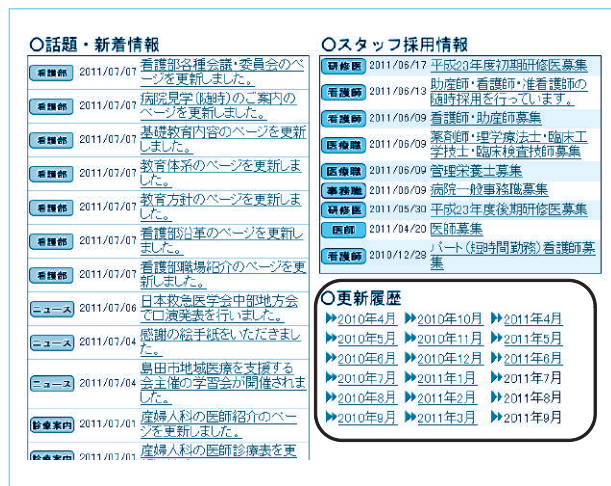
の量や種類、更新頻度は病院によりさまざまである。当院は静岡県島田市により開設された病床数536の急性期の病院である。島田市には当院以外に病院はなく、地域の基幹病院として、救急・急性期医療を一手に引き受けている。

図1 市立島田市民病院 Web サイトのトップページ上段



当院では、Webサイトを1999年に開設し、2007年に全面的にリニューアルした(図1)。最初からWebサイトの業務を外部委託せず、すべて職員が手作りで作成・運用してきた。サーバーは、インターネットプロバイダー事業者の提供するレンタルサーバーを利用しており、コンピューターウイルス等への対策については、事業者の技術・設備を利用している。当院では、病院Webサイトのファイルのコピーを電子カルテのサーバー(院内設置、外部との接続なし)に置き、院内の電子カルテ端末から、病院Webサイトを閲覧できるようになっている。ただし、院内LANのため外部サ

図2 市立島田市民病院 Web サイトのトップページ下段



話題・新着情報欄で更新を知らせるとともに、右下に月別の更新履歴を表示している。

図3 スタッフの氏名、資格公表例

診療放射線室

放射線量の紹介 スタッフ紹介 部門紹介

スタッフ紹介

■診療放射線技師(24人)

職名	氏名
診療放射線室室長	森 佳久
診療放射線室技師長	秋山 清純
診療放射線室技師長補佐	橋松 文孝

辰巳 勝之	福島 知之	渡辺 建彦	鈴木 清孝
中道 善章	白井 真理	畑 利浩	宿島 久志
横田 政則	加藤 和幸	野末 恭弘	山崎 俊樹
和田 一也	池谷 正治	鈴木 陽一郎	大井 秋子
廣澤 和美	鈴木 邦幸	山中 一仁	佐藤 正和
前島 由佳			

■学会認定及び国家ライセンス

第1種放射線取扱主任者	〈秋山、白井、畑、山崎〉
放射線治療専門技師	〈白井〉
超音波検査士(消化器領域)	〈福島、横田、廣澤〉
超音波検査士(体表臓器領域)	〈福島、横田〉
超音波検査士(健診領域)	〈宿島〉
日本消化器集団検診学会胃がん検診専門技師	〈橋松、加藤〉

イトへのリンクは閲覧できないという制限はある。

2008年4月に現事業管理者が病院長として赴任し、2009年から積極的にWebサイトの情報量を増やすこと、遅滞ない更新を院内各部署に奨励するようになった(図2～7)。これを続けているうちに、言われなくても自発的に情報を更新する職員が見受けられるようになり、職員の意識に変化が起きている手ごたえが感じられた。そこで、Webサイトにお

ける積極的な情報発信が職員の意識にどのような変化をもたらしたか確認するために、アンケート調査を行ったので、その結果を報告する。

方 法

2010(平成22)年8月23日から9月24日までの1カ月間、全職員を対象に電子カルテを用いて、アンケ

ート調査を実施した。電子カルテ端末に質問を載せ、画面上でラジオボタンを選択したり、自由記載したりして、回答してもらった(図8)。このツールは医療情報部が作成した。回答結果は、各端末での入力終了と同時に、サーバー上の集計ファイルで自動集計され、回答数やパーセントが自動的に算出された(図9)。このツールのおかげで、アンケート回答数の推移を容易に把握でき、集計作業も楽に行うことができた。

図4 検査件数などのデータ公表、スタッフの写真公開例

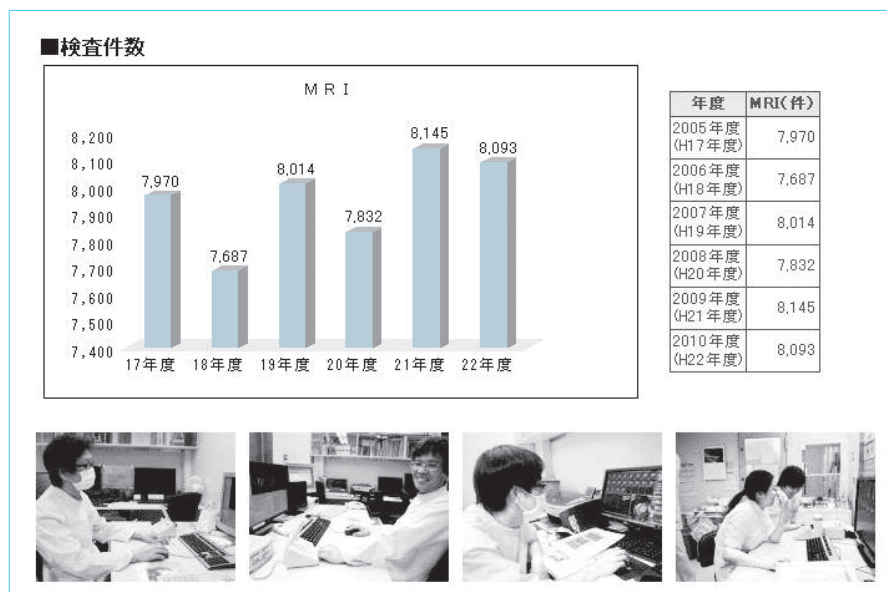


図5 統計データの公表例

運営方針

- ▶ 病院事業管理者・院長あいさつ
- ▶ 理念・基本方針
- ▶ 職業倫理綱領
- ▶ 医の倫理綱領

交通・館内案内

- ▶ 交通案内
- ▶ 館内案内

病院概要

- ▶ 概要
- ▶ 沿革
- ▶ 指定医療機関等認定施設
- ▶ 高度医療機器一覧
- ▶ 組織
- ▶ 会議・委員会・審議会

病院決算

- ▶ 決算書

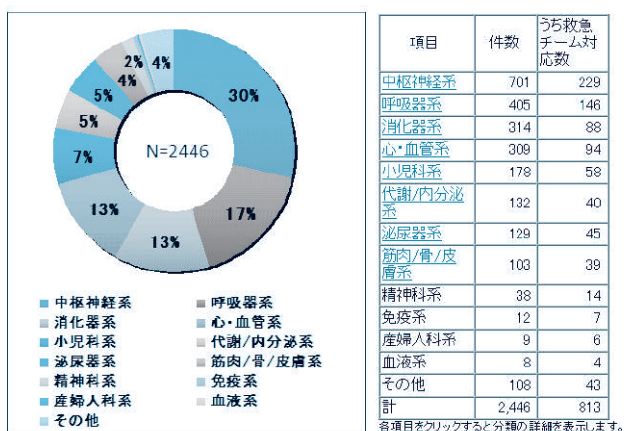
院内統計

- ▶ 救急患者数統計
- ▶ 救急車搬送分類
- ▶ 外来・入院患者数統計
- ▶ 診療科別外来患者数
- ▶ 診療科別入院患者数
- ▶ 手術件数
- ▶ 臨床指標

市立島田市民病院 TEL:0547-35-2111/FAX:0547-36-9155
E-mail:info@municipal-hospital.shimada.shizuoka.jp

病院トップ > 病院紹介 > 救急車搬送分類 > 救急車搬送分類(2010年度) > 救急車搬送大分類 > 内因性疾患分類

内因性疾患分類



救急患者数、入院・外来患者数統計は毎月更新している。下図は年間救急車搬送患者の疾患別分類データの一部。

図6 臨床指標（クリニカルインディケーター）の一部

1 原発性肺がん入院中死亡率（切除例）

2009年度	0% 0人/47人
2008年度	0% 0人/20人
2007年度	0% 0人/22人
2006年度	0% 0人/25人

◆計算方法◆

【分子】 分母対象例のうち手術後30日以内に死亡退院した患者数（がん以外が死亡原因である場合も含む）

【分母】 計測期間内に退院した患者のうち、「肺がん」治療を目的として入院し、入院中に肺切除術が行われた患者数

2 胃がん手術：平均術後在院日数

2009年度	19.6日 805日/41人
2008年度	15.9日 836日/44人
2007年度	19.2日 865日/44人
2006年度	23.5日 1,057日/45人

◆計算方法◆

【分子】 分母対象例の術後在院日数（退院日－手術日）の総和

【分母】 計測期間内に退院した患者のうち、「胃がん」を主病名として入院し、入院中に全身麻酔による手術治療（開腹もしくは腹腔鏡下による胃切除手術、胃部分切除術）を受けた患者数

※2008年度の対象患者の平均年齢は前年に比べ3歳ほど高齢化している。

【平均年齢】
2009年度：72.3歳 2008年度：69.4歳 2007年度：68.8歳

図7 診療各科の症例数、治療件数等の公開例

循環器内科

心臓や血管の病気を診療します。

診療実績

■各検査・治療の件数 2010年1月～12月

◇検査件数

血管造影	心臓カテーテル検査(冠動脈造影)	536件
	心臓電気生理検査	8件
エコー	心臓超音波検査(心エコー)合計	7,828件
	経食道心エコー	
	ドプタミン負荷心エコー	
	コントラスト心エコー	
	冠血流ドプラーエコー	
	頸動脈エコー	982件
	深部静脈エコー	433件
	上肢動脈エコー	- 件
	下肢動脈エコー	- 件
	末梢動脈エコー	43件
生理検査	トレッドミル運動負荷検査	496件
	ホルター心電図(24時間心電図)	1,133件
	脈波・ABI	1,124件
	血圧検査(起立血圧、ホルター血圧)	304件
	体液成分検査	31件
CT	冠動脈MD-CT(3D-CT)	229件

◇治療件数

経皮的冠動脈形成術(カテーテル治療)	236件
経皮的末梢血管形成術(カテーテル治療)	13件
カテーテルアブレーション(不整脈に対するカテーテル治療)	6件
恒久ペースメーカー植込み手術(新規)	34件
恒久ペースメーカー交換術	17件

◇治療成績

経皮的冠動脈形成術 初期成功率(CTO*病変含む)	97.5%
経皮的冠動脈形成術 初期成功率(CTO*病変除く)	99.1%
アブレーション 初期成功率	100%
PTA	-

(*: CTO=慢性完全閉塞)

◇治療合併症

死亡例	0例
手術を必要とした血腫、動脈瘤	1例
緊急バイパス手術	0例
輸血を要した出血	0例
合併症発生率(心臓カテーテル治療)	1.6%

図8 電子カルテ端末でのアンケート内容

Webサイトアンケート

当院のWebサイトの利活用に関しアンケート調査を実施します。以下の質問にお答えください。

- Q1. 当院Webサイトで情報を発信することにより、仕事に対する意識が変わりましたか？
- ①変わらない
 - ②変わった

- Q2. Q1で②を選択した場合 → その内容を以下にお書きください。

- Q3. 当院Webサイトで情報を発信することについて、どのようにお考えですか？
- ①情報発信の必要は全く必要ない
 - ②情報発信は必要である

- Q4. Q3の回答の理由を以下にお書きください。

- Q5. Q3で②を選択した場合 → その量は？
- ①少量でよい
 - ②中等量でよい
 - ③大量がよい

- Q6. Q3で②を選択した場合 → その更新頻度は？
- ①1回/年
 - ②1回/(?)
 - ③適時、頻回に更新

- Q7. Q6で②を選択した場合 → その単位は？
- 1日

- Q8. 当院Webサイトを見ることがありますか？
- ①ない
 - ②ある

- Q9. Q6で②を選択した場合 → 頻度(1回/(?))

1日

- Q10. 当院Webサイトで他部署の箇所を見て、他部署の業務への理解が深まりましたか？
- ①いいえ
 - ②はい

- Q11. Q10で②を選択した場合 → よろしければ、以下にその内容をお書きください。

Q12とQ13は、Q8で②(当院Webサイトを見たことがある。)と回答した方にお尋ねします。

- Q12. 当院Webサイトを他の病院のWebサイトと比べて ～ デザインは？
- ①見劣りする
 - ②同等
 - ③優れている

- Q13. 当院Webサイトを他の病院のWebサイトと比べて ～ 情報量は？
- ①見劣りする
 - ②同等
 - ③優れている

- Q14. 当院Webサイトは広報として効果を上げていると思いますか？
- ①思わない
 - ②思う

- Q15. Q14で②を選択した場合 → 以下に、どのような効果か、お書きください。

- Q16. 最後に、所属部署をお答えください。

- ①診療部
- ②看護部
- ③診療技術部・医療情報部・薬剤部
- ④事務部・連携室・安全管理室

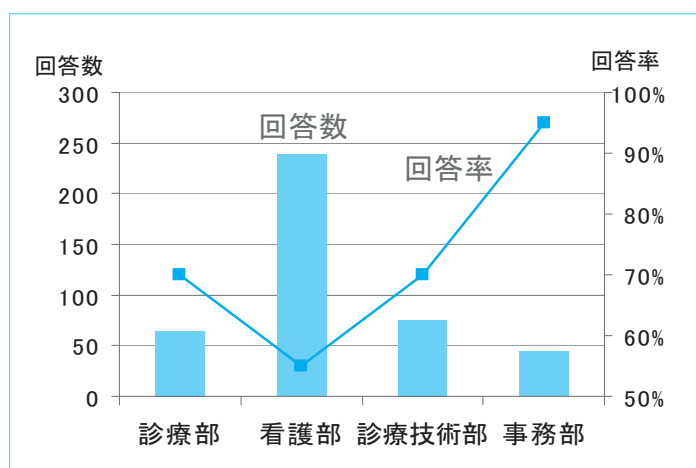
ご協力ありがとうございました。入力終了ボタンを押し、画面右上の×ボタンを押して画面を閉じて。

入力終了 閉じる

図9 アンケート結果の自動集計

A	B	C	D	E	F
QT	Webサイトアンケート	Count	Percent	Graph	
	Total of Answers	425			
Q1	当院Webサイトで情報を発信することにより、仕事に対する意識が変わりましたか？				
S	①変わった	352	82.8%		
S	②変わらない	73	17.2%		
Q2	Q1で②を選択した場合 → その内容を以下にお書きください				
TF					
Q3	当院Webサイトで情報を発信することについて、どのようにお考えですか？				
S	①情報発信の必要は全くない	30	7.1%		
S	②情報発信は必要である	395	92.9%		
Q4	Q3の回答の理由を以下にお書きください				
TF					
Q5	Q3で②を選択した場合 → その量は？				
S	①少量でよい	100	23.5%		
S	②中等量でよい	286	67.3%		
S	③大量がよい	39	9.2%		
Q6	Q3で②を選択した場合 → その更新頻度は？				
S	①1回/年	102	24.0%		
S	②1回/(?)	108	25.4%		
S	③適時、頻回に更新	215	50.6%		
Q7	Q6で③を選択した場合 → その単位は？				
C	1日	286	67.3%		
C	3日	7	1.6%		
C	7日	12	2.8%		
C	14日	9	2.1%		
C	1月	38	8.9%		
C	2月	10	2.4%		
C	3月	25	5.9%		

図10 所属別の回答数と回答率



結 果

総回答数は425件で、回答率は63%であった。所属別の回答数では、職員数の多い看護部からの回答が全体の56%を占めた。しかし、看護部の回答率は54.2%で、診療部の70.6%、診療技術部の71.0%より低かった。最も回答率が高かったのは、事務部で93.8%であった(図10)。

質問1 Webサイトで情報を発信することにより、仕事に対する意識が変わったか？

変わったという回答が83%を占めた。「情報発信することで、仕事自体を公表している感が生まれ、仕事に対する意欲が向上した」、「診療数や臨床指標を公表するようになったので、根拠に基づいた診療、ガイドラインに沿った診療を心がけるようになった」、「各科の専門性なども公表するようになったため、一層その分野に対する勉強の意欲がわいた」、「スキルを他の医療機関と比較するようになった」、「新たに資格を取るための勉強を始め、取得はもちろん、新たな知見も身についた」、「他部門、他部署の人々が考えていることや目標、理想が

理解でき、切磋琢磨する意識が強くなった」などのコメントがあった。

質問2 Webサイトでの情報発信について、どのように考えるか？

回答者の93%がWebサイトでの情報発信が必要であると答え、回答に部門間の差はなかった。その理由として、「現代はインターネット社会なので、新鮮な情報を発信していくことが当院のPRにつながる」、「医学生・看護学生など、当院に就職しようと

する者は、Webサイトの情報を見て応募してくるから」、「適正な救急外来受診を考えるようになって欲しいから」、「適確に情報を発信していくことは、病院の正しい情報を認識してもらうために必要である」などが記載されていた。

質問3 情報の発信量はどのくらいが適当ですか？

「大量がよい」が10%、「中等量がよい」が70%、「少量がよい」が20%であった。部門別にみると、「大量がよい」と回答した割合が最も高かったのが診療部の17%で、逆に低かったのが看護部の6%であった。「少量でよい」と回答した割合は診療部と看護部がそれぞれ20%で他部門よりも高かった。

質問4 更新頻度はどのくらいが適当ですか？

54%が「適時、頻回に更新」と回答し、新鮮な情報発信が必要と感じている一方、20%が「1年に1回」と回答した。部門別にみると、「適時、頻回に更新」と回答した割合が、診療部48%、看護部51%、診療技術部64%、事務部70%で、事務部が最も高かった。

質問5 当院Webサイトを見ることがありますか？

77%が「ある」と回答した。部門別にみると看護部の31%が「ない」と回答し、他部門と比較して「ない」と回答した割合が特に高かった。

質問6 どのくらいの頻度で見ますか？

15%が「1日～1週間に1回」、34%が「2週間～1月に1回」と回答した。部門別にみると、事務部では「1日～1週間に1回」と回答した割合が50%で、他の部門と比較してWebサイトを閲覧する頻度が高いことが分かった。それ以外の部門では閲覧の頻度に大きな差はなかった。

質問7 Webサイトで他部署のページを見て、他部署の業務への理解が深まったか？

「深まった」という回答が全体では57%で、部門別にみると、診療部44%、看護部54%、診療技術部57%、事務部80%で、事務部が最も高かった。「他科の診療内容に関して、理解が深まった」、「他部署の業務を院内で実際見ることが少ないので分かりにくい、Webサイトで説明があると理解できる」、「情報がすぐに更新されているため、スタッフの情報交換に役立っている」、「スタッフの紹介などが新たに充実してきたので、院内の連携も取りやすくなってくると思う」、「救急の統計で、救急搬送の実態がよく分かった」、「研究発表、業務以外の内容など、

どんな事に力を入れているかをうかがい知ることができる」などのコメントが寄せられた。

質問8 当院Webサイトを他の病院のWebサイトと比べて、デザインは？

「同等」と回答したのが68%、「見劣りする」と回答したのが18%であった。「見劣りする」と回答した割合は部門間で大きな差がなかった。

質問9 当院Webサイトを他の病院のWebサイトと比べて、情報量は？

「優れている」と回答したのが21%、「同等」と回答したのが69%であった。部門別にみると、診療部では45%が「優れている」と回答したのに対し、看護部ではわずか6%であった。

質問10 当院Webサイトは広報として効果をあげていると思いますか？

「効果をあげている」と回答したのが64%であった。部門別にみると、診療部66%、看護部57%、診療技術部76%、事務部77%であった。「島田市民病院へ赴任する際に、Webサイトをまず見たから、医師や研修医、職員を集めるのに役立っていると思う」、「オープンナースィング(看護学生向けの病院見学会)などWebサイトを見て来てくれている」、「医学生が、臨床研修の場として当院を選択する際の重要な情報発信の窓口となっており、全国から問い合わせがくる」、「他部署の情報を得ることができる」などのコメントが寄せられた。

考 察

どの病院であっても、そのWebサイトにおける情報発信の目的に、患者への情報提供による集患、不足している医師や看護師の勧誘が含まれることに異論はないであろう。当院のアンケート結果でも、大部分がWebサイトでの情報発信が必要であると回答している。

当院では、2009年より、Webサイトの充実を図ってきた(図2～7)。今回のアンケート結果から、

- 1) 職員の写真、氏名、専門分野、取得資格、臨床指標(クリニカルインディケーター)や各科の手術件数、疾患別患者数等の公表によって、スキルアップや業務見直しの意識が醸成されること
- 2) Webサイトで他部署の業務・活動内容を知るこ

とにより、他部署への理解が深まり、院内の相互理解が促進されること

が窺える。特に、事務部では、他部署への理解が深まったという回答が80%に達した。これは、市役所からの異動で来ている事務職員が少なくなく、事務室内の仕事にばかり従事していて、院内他部署の具体的な仕事内容を十分理解していなかったことを反映していると推測される。当院では、Webサイトの情報を自発的に更新する職員が増えてきており、職員の意識に変化が起こっている。このような変化が起こることを当初、予想していなかっただけに、病院にとって好ましい限りである。ただし、医師の写真公表に関しては同意が得られた一部の医師のみが載せている。

当院のWebサイトを担当する職員は当院Webサイトの情報量は他院のそれより多いと思っている。しかし、実際に当院の情報量が他院より「優れている」と回答したのは診療部では45%であり、看護部ではわずか6%であった。診療部では科別にスタッフの情報や統計情報を体系的に掲載しているのに対し、看護部では部全体の情報をまとめて掲載するなど、情報量が少ないことが、このような結果に結びついたと考えられる。情報の充実については、特に力をいれて取り組んで来たつもりだが、病院全体では69%が他院と同等と感じており（情報発信量は中等量がよいと考える職員が70%を占めた）、情報の掲載方法により一層の工夫、改善が求められている。

当院のWebサイトは文字どおり、職員の手作りで作成・運用されてきた。全面リニューアルから4年が経過した2011(平成23)年夏に、NPO法人日本HIS研究センターが主催するヘルスケア情報誌コンクルのホームページ部門に応募し、審査を受けた。5点満点の評価法で、掲載情報とメンテナンスでは5点であった。デザインに関しては、院内のアンケートで68%の職員が他院と同等と回答していたが、審査ではデザインが3点で、工夫が必要とのコメント

をいただき、院内の職員と外部審査員との間に乖離を認めた。これを契機にデザインをより見やすく、洗練されたものにすべく、検討している。また、情報量の増加に伴い必要な情報の検索性が悪くなっており、この点の改良も必要であると考えている。

自院のWebサイトを見ない職員が全体の23%おり、看護部ではこの割合が31%と高かった。すでに電子カルテ端末でWebサイトを閲覧できるようにしてあったにもかかわらず、閲覧頻度も総じて高くないことも判明した。これらの結果を踏まえて、電子カルテ掲示板の新着情報にサイトの更新情報を毎回掲載することを始めた。今後も、見やすい形で内容を充実させ、さらに多くの職員にWebサイトを見ってもらうよう、啓発していきたい。

『New England Journal of Medicine』の2009年4月16日号に掲載されたハーバード大学からの論文「Use of Electronic Health Records in U. S. Hospitals」(第360巻1628-1637頁)によると、2008年3月～9月の調査に回答した米国の急性期病院のうち(回答率63.1%)、電子カルテを導入していたのは、わずか1.5%であった。オーダーリングまでの導入に限っても、17%であった。IT先進国と言われる米国で、電子カルテの普及率は2008年当時、極めて低かった。その理由として、導入や保守に多額の費用が発生することが挙げられていた。当院では、2002(平成14)年から電子カルテが稼働ししたが、まさしくその年より、電子カルテに関わる経費負担に伴い、赤字が大幅に増え、その状態が最近まで続いた。今回のアンケートでは、電子カルテ端末からの回答とエクセルによる自動集計を用いた。アンケート期間中、職種別回答数の伸び具合をモニターできたので、回答が少ない職種に回答を働きかけた。回答の集計は自動的に行われ、紙を用いたアンケートに比べ、労力が極めて少なく済んだ。電子カルテを導入しても、残念ながら診療報酬はもらえないが、このような利用法もある。